

「感謝の心」を生き貫く力に

上 廣 哲 治

「年末になると、その年にお世話になった方々、一人ひとりの顔を思い浮かべて、感謝の気持ちを胸に刻んで新しい年を迎えるのです」

ある年配の会友さんが、そうおっしゃいました。感謝の気持ちだが、来るべき新しい年を生き貫く力になるといふのです。そう言えば、現在ではやや儀礼的な慣行となつたお歳暮も、暮れに、平素お世話になつた方々へ、贈り物の形で感謝の心を表す習慣です。

師走八日の針供養も、年神さまを迎えるお正月行事を始めるにあたって、お世話になつた道具に感謝し、供養する行事です。諸説あるようですが、年神さまを祭る正月行事は十二月八日が「事始め」となり、二月八日が「事納め」となります。田の神さまを祭るときは二月八日が農事の「事始め」となり、十二月八日が「事納め」となるのだそうです。

共通しているのは、何事かを始めるにあたって感謝の気持ちを新たにすることです。それが、物事をうまく進め、成就させる力にもなるからです。

ところが今、利己主義をよしとする風潮が蔓延し、「感謝」という言葉が力を失つてきているように感じられます。ですから「感謝」が、「生き貫く力」になるとは、現代人には、にわかには信じ難いかもしれません。それは現代人が、便利な生活のなかで「生かされている」という感覚を見失っているからではないでしょうか。例えば、針供養の針にしても、今の生活で使うことはめっきり少なくなりました。

ひと昔前までは、衣服にほころびが出れば、それを一針一針縫い上げ、修繕して再びその服を大事に着たものです。繕いごとは主に主婦の仕事で、針をいかに巧みに使うかによって、仕上がりが異なります。うまくできたときは、それは使い手の技量であるとともに使いやすい針のお蔭でもあります。そこから針への感謝の気持ちが湧いてきました。日々の針仕事で使いこまれた針は、折れたり曲がったりして、やがて使えなくなります。それを捨てずにとっておき、柔らかい豆腐などに刺して、「お世話になりました。どうぞゆっくりお休みください」と、感謝をこめて供養し、裁縫の上達を祈つたのです。

感謝の気持ちや、物を大切にすることは、このように多少手間暇のかかる、不便な暮らしのなかで育まれていったのでしょうか。

サービスと技術の革新は、経済的な豊かさと同時に便利で快適な暮らしをもたらしました。多くの人が、服がほころびればリフォーム専門店に出せばいい、服は消耗品だから買い替えればいいと考えます。多様なサービスや物が大量に溢れた結果、物への愛着も、また、人と人との心の通った関わり合いさえも希薄にさせてしまったのです。

便利で快適な暮らしが、自分一人の力だけで生きられるという傲りを生んだのではないのでしょうか。

便利さのなかで「感謝」という言葉が力を失ってきているのです。

目に見える形のお世話には感謝をし、お礼を言うでしょう。受けた恩恵に対して感謝するのは当然のことです。しかし、見方によっては取り引きにも似ています。受け取った「お世話」に応じた分の「感謝」はするとう意識です。もちろんそれは大事なことです。しなければならぬことでしょう。

ただ、わが会という「感謝」とは、それらを含めて、より本質的なものではないかと考えるのです。先の年配会友さんの「一人ひとりの顔を思い浮かべて」の感謝も、針を供養する人々の心に流れている感謝も、そこには「生かされていること」への深い感謝があると感ずるのです。「人間は大いなるものに生かされている存在である」という自覚が潜んでいるように思うのです。目にも見えず、気付きにくいかも知れませんが、今生きていられること、それだけです。にさまざま恩恵を受けている、その事実に対する感謝です。

生かされている現実には感謝の思いを持ち得たことで、奇跡的な復活を遂げた人がいます。『命の授業』を著した中学校の元体育教師の腰塚勇人さんです。

腰塚さんは三十六歳のとき、奥さんと二人でスキーに行きました。前日の雨でゲレンデの雪は氷のように固まっていました。最初はゆっくりと慎重に滑っていましたが、スキー検定一級の腕前をもつ腰塚さんは、つい油断してスピードを出してしまったのです。「スピードが出過ぎた！」と思つたときにはコブに乗り上げ、体は宙に浮き上がり、そのまま後頭部から落下し、首の骨を折ってしまいました。

すぐに救急搬送されて、専門医の手術でなんとか一命をとりとめました。首から下はまったく動きません。このようなケースでは、ほとんど回復が見込めず、医師からは「一生寝たきりか、よくても車

イスの生活になるだろう」と告げられました。

元気で活発な生活から一転、寝たきりの状態を強いられた腰塚さんは、人生に絶望して、寝たまま舌を噛み切ろうと試みました。しかし、あまりの痛さに我に返り、自分には「生きる」という選択肢しかないことを知ります。先の見えない状態に絶望していたとき、さまざまな人が、「生きる勇氣」を与えてくれていることに気付き、絶望の淵から這い上がるきつかけを得たのです。

奥さんは「何があっても、ずーっと一緒にいるから……」、母親は「代わられるものなら代わってあげたい……」、生徒や仲間たちは「先生、待っているから……」と、口々に訴えます。

自分が必要とする人々の存在を知ったとき、腰塚さんは徐々に生きる氣力を取り戻していきました。「自分の命はあらゆるものに助けられ、生かされていること」に気付いた腰塚さんは、入院している間、「すべてに感謝する」実践に徹しました。そして再び歩けるまでに回復したのでした。

「感謝の言葉」を口にしていくと、身体の〈抵抗力〉が高まるし、〈エネルギー〉が上がってくる」と腰塚さんは言います。彼は、感謝の言葉が奇跡を招いたと確信しているようです。それが奇跡かどうかはわかりません。しかし、感謝の言葉は、周囲を巻き込んでその場を明るくし、善い環境を整えることだけは確かでしょう。現在では腰塚さんは命の大切さを訴える講演活動をしています。

そこで、今年最後の実践課題です。「感謝」は実践の原点です。感謝の心は、あなたをさらなる実践に駆り立てます。感謝の心が実践の喜びを生み、その喜びが背中を押してくれるときに、物事を成就の道へと向かわせるのです。「生かされている」という自覚から生まれる感謝の気持ちは、きつと来るべき年を生き貫く力になるはずで